

13	豊橋	豊橋市立本郷中学校	キムラ エリ 名前 木 邨 恵 梨
分科会番号	2	分科会名	外国語教育

必然性のある英会話活動や帯活動を通して、すすんで英語で会話を続ける生徒の育成
～2年英語科「Hada トーク！ 豊橋とみらいの架け橋になろう！」の実践を通して～

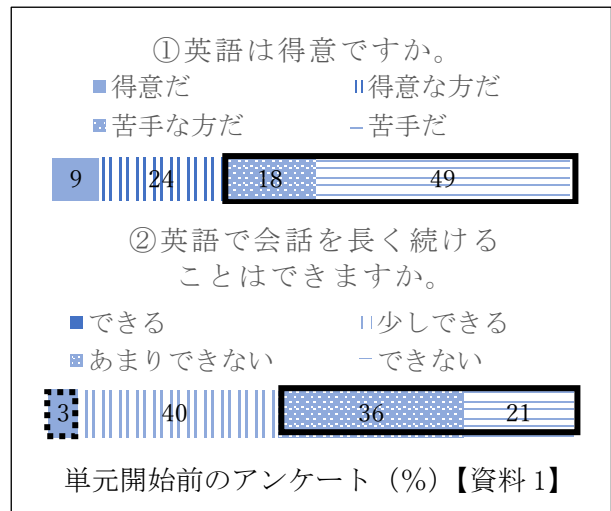
1 主題設定の理由

本学級には、英語が得意で、意欲的に友達やALTと会話できる生徒がいる一方で、英語が苦手な生徒も多い。英語が苦手な生徒の中には、発音するのが精一杯だったり、自分の力で文を作ることができなったりする生徒もいる。単元開始前にアンケート調査を行ったところ、7割近くの生徒が、英語に対して苦手意識をもっていることがわかった【資料1の①】。

また、コロナの影響で英会話活動が制限されていたため、英語で会話することに自信をもてない生徒が多い。英語が得意な生徒でも、言いたいことをすぐに英語で話せなかったり、話を広げられなかったりするなど、会話を長く続けることができない。単元開始前に行ったアンケート結果から、会話を長く続けることができないと感じている生徒は6割近く、会話を長く続けることができると言い切れる生徒はわずか3%であることがわかった【資料1の②】。

学習指導要領では、「日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりする」ことが、話すこと[やり取り]の目標として設定されている。本学級の生徒にとっては、英語を使ってさまざまな人とやり取りをする必要性や、英語でコミュニケーションをとることの楽しさを感じる機会が少なかったと考えられる。

このような学級の実態や社会の要請から、生徒一人一人が、「自分の英語が相手に伝わってうれしい」「もっと英語で話したい」と感じ、すすんで英会話活動に取り組んでほしいと考えた。そして、「英語を使えば世界が広がり、多くの国の人と関われることを学んでほしい」「会話を長く続けられれば、お互いのことをより詳しく知ることができるという喜びを感じてほしい」と願いをこめて、本主題を設定した。



2 研究のねらい

(1) めざす生徒像

ア 英語を話すことの必然性や楽しさを感じ、すすんで英会話活動に取り組むことができる生徒
イ お互いのことを詳しく知りたいという思いをもち、会話を長く続けることができる生徒

(2) 研究の仮説と手だて

アに対する仮説

英語を使う必然性のある活動を取り入れたり、自分のレベルにあった目標を設定したりすることで、すすんで英語を話すことができるようになるだろう。

手だて① 外国人生徒初期支援コース「みらい西」と連携した会話活動の設定

外国人生徒初期支援コース「みらい西」の児童生徒と、お互いの住む地域について話す活動を取り入れることで、英語を使う必然性を感じながら、すすんで会話を続けられるようにする。

手だて② レベル別のCAN-DOリストと連動した振り返りシートの活用

レベル別のCAN-DOリストを作成することで、自分は何ができるようになればよいかを明確にし、できたときの達成感を味わうことができるようにする。

イに対する仮説

帯活動に継続して取り組んだり、会話を続ける方法を学び合う場を設定したりすることで、会話を長く続けられるようになるだろう。

手だて③ 帯活動「1 minute talking」

帯活動として、身近な話題について1分間会話をする活動に継続して取り組むことで、会話を続けることに慣れるようにする。

手だて④ 会話を続ける方法を学び合う場の設定

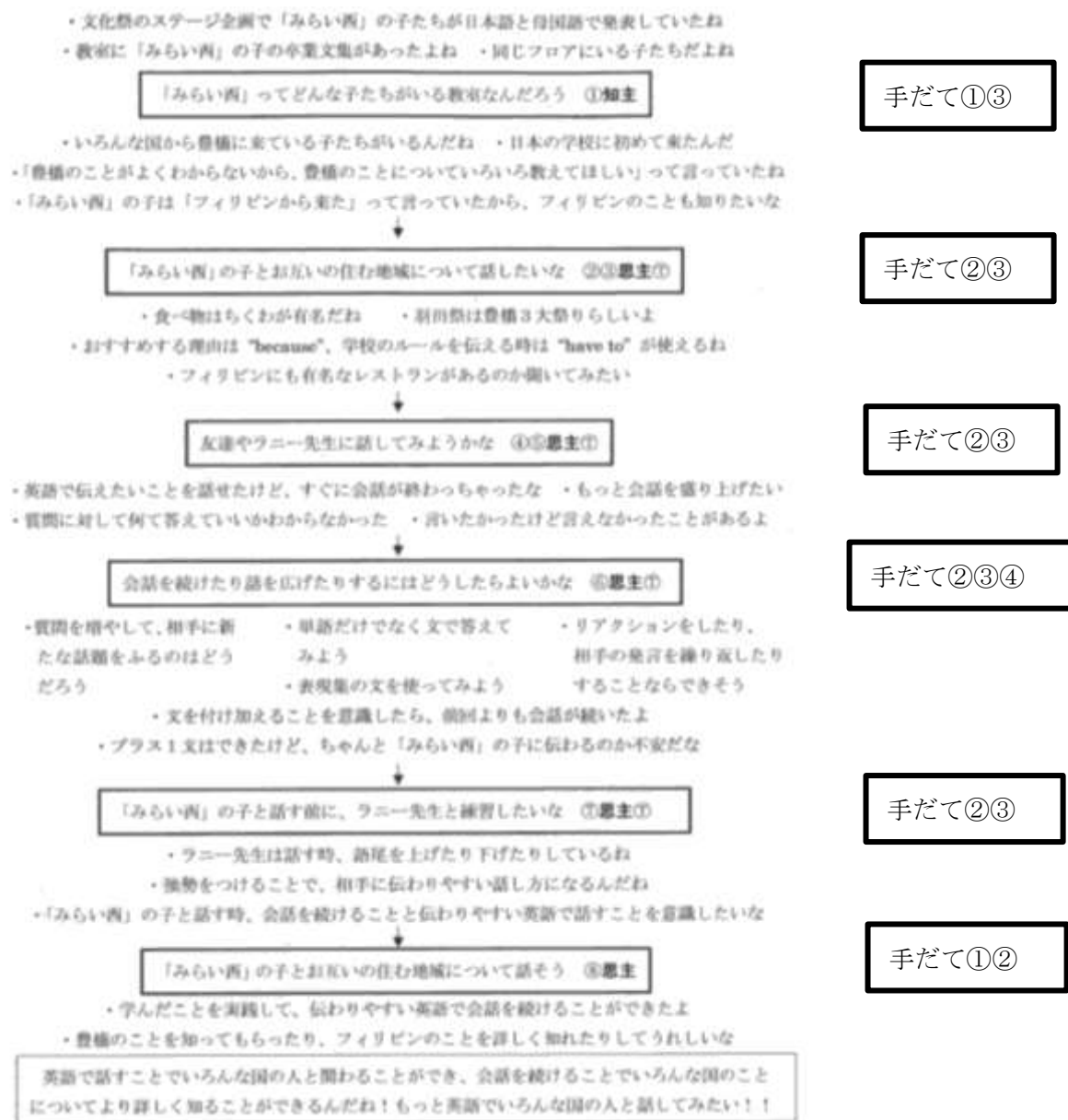
会話を続けるための技術や英語表現を生徒同士で学び合う時間を設定し、文を付け加えながら会話ができているグループに演示を促すことで、文を付け加えて会話を長く続けられるようにする。

(3) 仮説の検証方法

生徒Aを抽出生徒とし、生徒Aや学級全体の変容を追い、仮説を検証していく。

生徒Aは、英語の学習に前向きな姿勢で取り組んでいる。ALTとの会話テストでは、既習表現を使って自分のことを伝えようとしたり、ALTの話に真剣に耳を傾けたりする姿が見られた。しかし、英語に対しては苦手意識をもち、文をすぐに作ってスムーズに会話ができないことを課題としていた。そこで、本研究を通して、自信をもって「みらい西」の児童生徒と会話をして、「もっと英語で話してみたい」と意欲を高めてほしいと考えた。

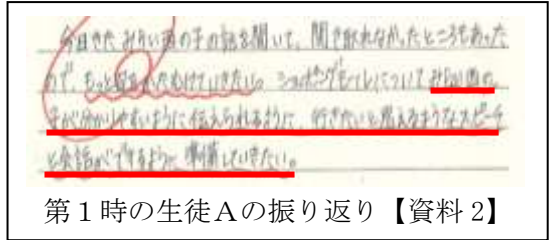
(4) 単元構想図(8時間完了) ①…タブレットを活用した学習



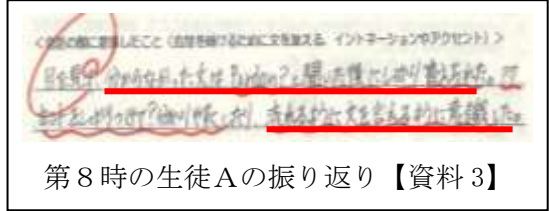
3 研究の実践と考察

(1) 外国人生徒初期支援コース「みらい西」と連携した会話活動の設定（仮説1－手だて①）

第1時には、「みらい西」に通うフィリピン出身の小学生2人と中学生1人が教室に来て、本学級の生徒たちと顔を合わせた。フィリピンの児童生徒が、「豊橋とフィリピンのことについて一緒に話したい」という願いを伝えている時、本学級の生徒たちは、フィリピンの児童生徒の英語を聞き取ろうと熱心に耳を傾けていた。生徒Aは、「みらい西の子にわかりやすく伝えられるように、（豊橋に）行きたいと思えるような会話ができるように準備していき」と振り返りに記述しており【資料2】、相手意識を持ち、すすんで会話に取り組もうとする姿が見られた。第2時～第7時でも、「みらい西」の児童生徒の写真を掲示したり、フィリピンのことを聞き出すために多くの質問を準備するように伝えたりするなどして、常に相手意識をもって会話の準備や練習ができるようにした。第8時には、豊橋とフィリピンのことについて会話をした。英語が苦手な生徒でも取り組みやすくするために、フィリピンの児童生徒1人と本学級の4～5人の生徒が会話をするという活動に設定した。生徒Aのグループは、「shopping mall」について、フィリピンの小5女子児童と会話をした。生徒Aは、会話の際に意識したこととして、「わからなかった文は、Pardon?と聞いた後にしっかり答えられた。」と振り返りに記述しており【資料3】、相手が言ったことがわからなくても英語で会話が続けようとしている姿から、英語を使う必然性を感じていたと考えられる。「(文を付け加えて) 流れるように文を言えるように意識」するなど、単元で学んだことを意識しながら、すすんでフィリピンの生徒と会話をする様子が見られた。



第1時の生徒Aの振り返り【資料2】



第8時の生徒Aの振り返り【資料3】

(2) レベル別のCAN-DOリストと連動した振り返りシートの活用（仮説1－手だて②）

第2時から第8時に使用するワークシートに、それぞれの時間で学習する内容に応じたCAN-DOリストを載せ、自分のレベルに合った目標を設定できるようにした【資料4】。また、振り返りの欄には、CAN-DOリストの目標達成度を「A」「B」「C」から選べるようにした。第2時から第8時に、生徒Aが決めた目標と目標達成度、振り返りは以下の通りである。

レベル	目標	選んだレベルに○をつける
3	文を即興で付け加えたり、会話全体を通して、イントネーションとアクセントをつけて読んだりすることができる。	
2	書いている文を付け加えたり、会話の半ばくらいはイントネーションとアクセントをつけて読んだりすることができる。	
1	リクエストの文を1つ書いたら、1つ0単語にアクセントをつけて読んだりすることができる。	

CAN-DO リスト【資料4】

時数	目標	達成度	振り返り
第2・3時	グループの中で率先して、英語での会話の流れを考えることができる	A	英語の文の内容を 班で共有したり 、 流れを説明して班全員 でできるように心がけた。
第4時	予想していなかった質問に対しても、即興で対応できる	B	自分の担当部分は、みらい西役の子から質問を聞き取り答えることができた。 予想しなかった質問の時にも答えることができたが、もっとスムーズに会話したい。
第5時	予想していなかった質問に対しても、即興で対応できる	B	フィリピンのことを聞くときに 質問が少し足りなかった ので改善していきたい。
第6時	考えていた文だけでなく、相手が言ったことに応じて即興で文を付け加えることができる	A	いろんな質問をすぐにできるように 、相手の答えに 反応したり疑問に思ったことを見つけたり したい。
第7時	会話全体を通して、イントネーションとアクセントをつけて読むことができる	A	イントネーションを意識 すると、 ラニー先生が聞きやすくなったのか、会話がスムーズに進んだ。アクセントをつけるとより相手が理解しやすくなる と思った。
第8時	文を即興で付け加えたり、会話全体を通して、イントネーションとアクセントをつけて読んだりすることができる	A	わからなかった文は Pardon? と聞いた後に しっかり答えられた 。 アクセントをしっかりとつけてわかりやすくしたり、流れるように文を言えるように意識 したりした。

生徒Aの振り返りの記述から、自分の目標が明確になり、自分で決めた目標を意識して取り組んでいたことがわかる。また、できた時の達成感を味わうことができ、前時までに学んだことを意識してすすんで会話をしようとしていたこともわかった。

(3) 帯活動「1 minute talking」(仮説2-手だて③)

毎時間の最初の5分を使って、決められたトピックについてペアで1分間話す「1 minute talking」を継続して行った。昨年度はコロナの影響で会話をあまり行ってこなかったこともあり、最初は会話が1往復で終わってしまったり、1分間会話が続かなかったりするペアがほとんどであった。そこで、「1 minute talking」用の掲示物や振り返りシートを作成し、リアクションや疑問詞を多く使って会話ができるようにした【資料5・6】。生徒Aは、「1 minute talking」を始めたばかりの頃は、疑問詞を使って



掲示物【資料5】

生徒Aの振り返りシート【資料6】

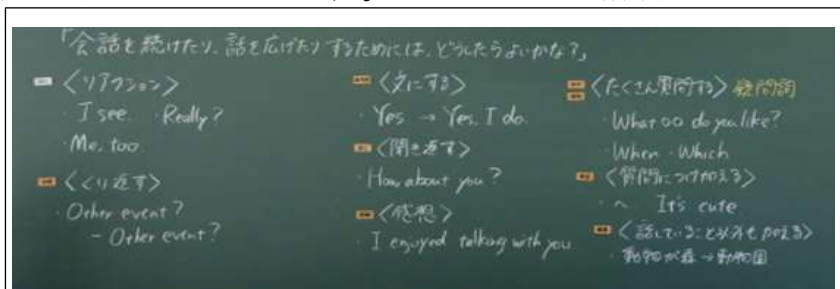
質問できたのは3回だったが、練習を重ねた結果、質問数が5回に増加した。疑問詞の種類に

ついて、始めたばかりの頃は what を多く使用していたが、慣れてくると what 以外のさまざまな疑問詞を使って質問できるようになった。帯活動の回数を重ねていくことで、会話をすることに慣れ、さまざまな疑問詞を用いて何度も質問し、会話を続けることができるようになっていったと考えられる。また、生徒Aは、「who を質問されたので、次は私が参考にして使いたい」とペアの生徒から学ぼうとする様子や、「why で聞かれたら because で答える」など、教師が朱書きした表現を積極的に使おうとする様子が見られた【資料6】。ペアを変えて多くの生徒と「1 minute talking」を行ったり、教師が朱書きをしてヒントを与えたりすることも、会話を長く続けることにつながったと考えられる。

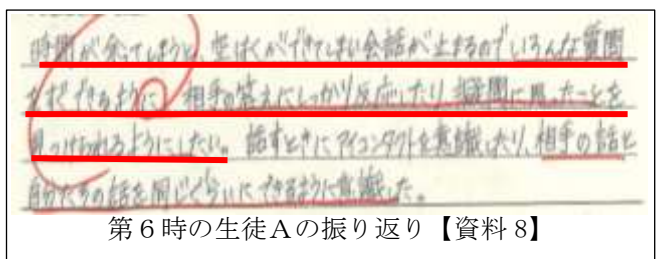
(4) 会話を続ける方法を学び合う場の設定 (仮説2-手だて④)

自信をもって会話をするように、第4時・第5時で友達やALTと練習する時間を設けた。練習では、準備した内容を話すことができても、話すことができなくなると会話が止まってしまうたり、言いたいことがあるのに英語で言えずに話を広げられなくなってしまったりするグループがほとんどであった。そこで、自分たちの会話を文字起こしたものと、JTEとALTの会話例を比べながら、会話を続けたり話を広げたりするにはどうしたらよいと思うかをワークシートに記入し、第6時に意見を出し合う時間を設けた。

「リアクションをする」「聞き返す」「感想を伝える」など、会話を続けたり話を広げたりするためのさまざまなアイデアを出し合った【資料7】。出てきた意見の中でどの方法が一番長く会話が続くかを生徒に尋ねると、「文を付け加える」と答えたため、どこに文を付け加えるかを考えてグループで練習した。その後、質問を付け加えた生徒Aのグループと、because を使って理由を付け加えたグループBを指名して演示を促した。演示を聞いていたグループの中で、振り返りに「質問を付け加えられるようにしたい」、「because を使って理由を付け加えたい」



会話を続けたり話を広げたりするためのアイデア【資料7】



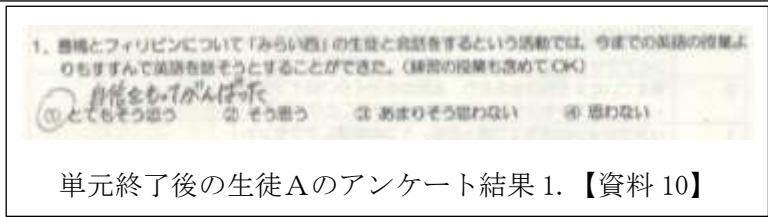
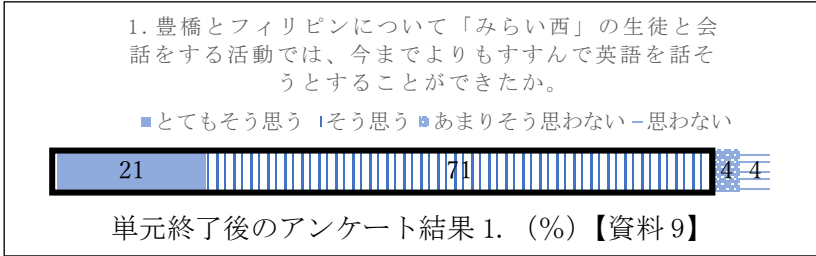
第6時の生徒Aの振り返り【資料8】

と書いている生徒がおり、文を付け加えることで会話を長く続けられると実感できたと考えられる。生徒Aは、振り返りに、「時間が余ってしまうと空白（沈黙）ができてしまい会話が止まるので、いろんな質問をすぐにできるように、相手の答えにしっかり反応したり、疑問に思ったことを見つけたりするようにしたい」と書いており、学んだことを生かして会話を続けようとしていたことがわかった【資料8】。

4 研究の成果

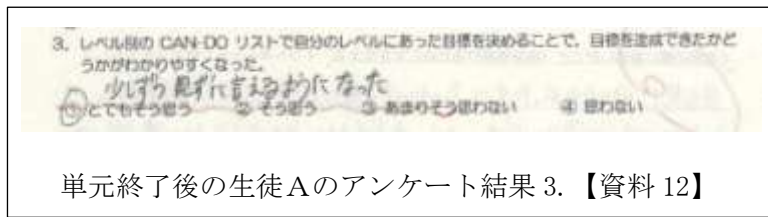
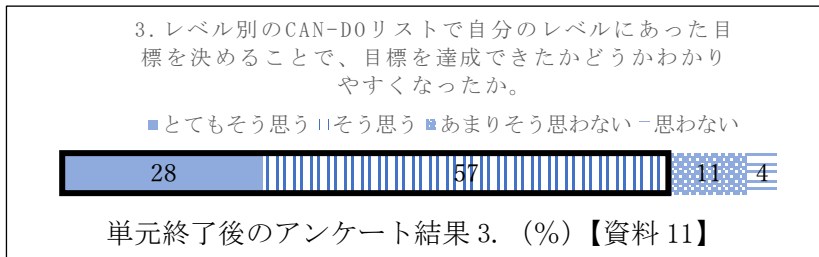
(1) 手だて①「外国人生徒初期支援コース「みらい西」と連携した会話活動の設定」の有効性の検証

生徒Aは、第1時で、すすんで会話に取り組もうという思いをもち、単元を通して意欲的に英会話活動に参加することができていた。単元のまとめである第8時では、単元で学んだことを意識しながら、すすんでフィリピンの生徒と会話することができていた。単元終了後にアンケートを行い、本学級の生徒に質問1.をたずねたところ、「とてもそう思う」と答えた生徒は21%、「そう思う」と答えた生徒は71%であることがわかった【資料9】。また、生徒Aは「とてもそう思う」と答え、「自信をもってがんばった」と記述していた【資料10】。「みらい西」との会話活動の設定によって、生徒Aは、自信をもってすすんで活動に取り組むことができたことがわかった。以上のことから、手だて①は有効であったといえる。



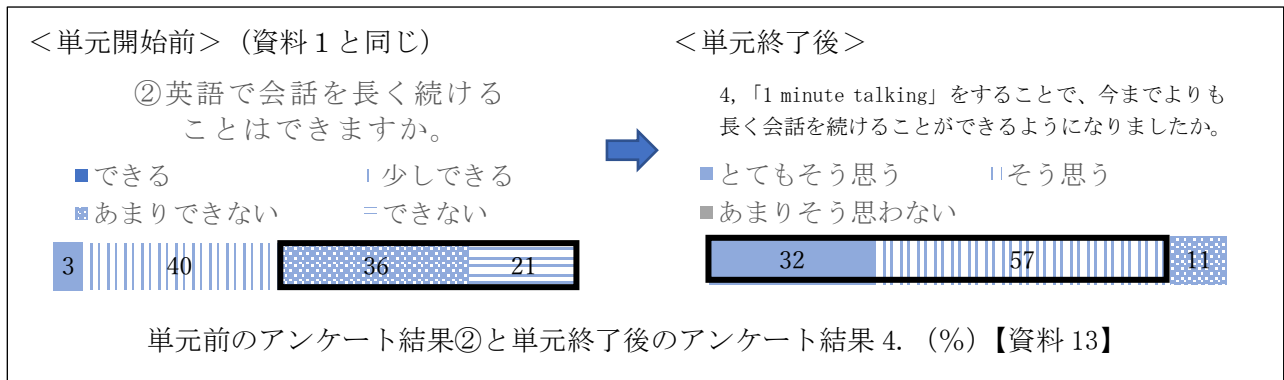
(2) 手だて②「レベル別のCAN-DOリストと連動した振り返りシートの活用」の有効性の検証

第2時から第8時を通してレベル別のCAN-DOリストと連動した振り返りシートを活用したことで、自分の目標を意識して取り組んだり、できた時の達成感を味わい、前時までには学んだことを意識してすすんで会話をしたりしていたことがわかった。単元終了後のアンケートで、本学級の生徒に質問3.をたずねたところ、「とてもそう思う」と答えた生徒は28%、「そう思う」と答えた生徒は57%であることがわかった【資料11】。また、生徒Aは「とてもそう思う」と答え、「少しずつ見ずに言えるようになった」と記述していた【資料12】。目標を明確にして活動に取り組んだことで、紙を見なくてもすすんで英語で質問ができるようになったことに達成感を得ていた。以上のことから、手だて②は有効であったといえる。

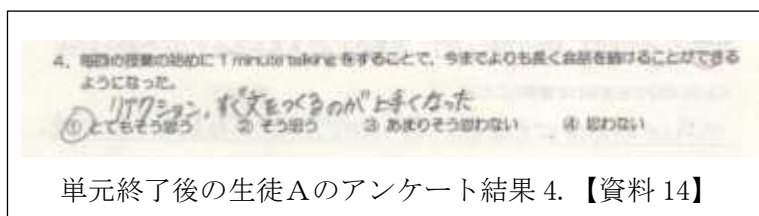


(3) 手だて③「帯活動「1 minute talking」への継続的な取り組み」の有効性の検証

生徒Aは、「1 minute talking」の回数を重ねた結果、質問数が増加した。また、慣れてくると what



以外のさまざまな疑問詞を使って質問できるようになった。単元終了後のアンケートで、本学級の生徒に質問 4. をたずねたところ、「とてもそう思う」と答えた生徒は 3 2 %、「そう思う」と答えた生徒は 5 7 %であることがわかった【資料 13】。

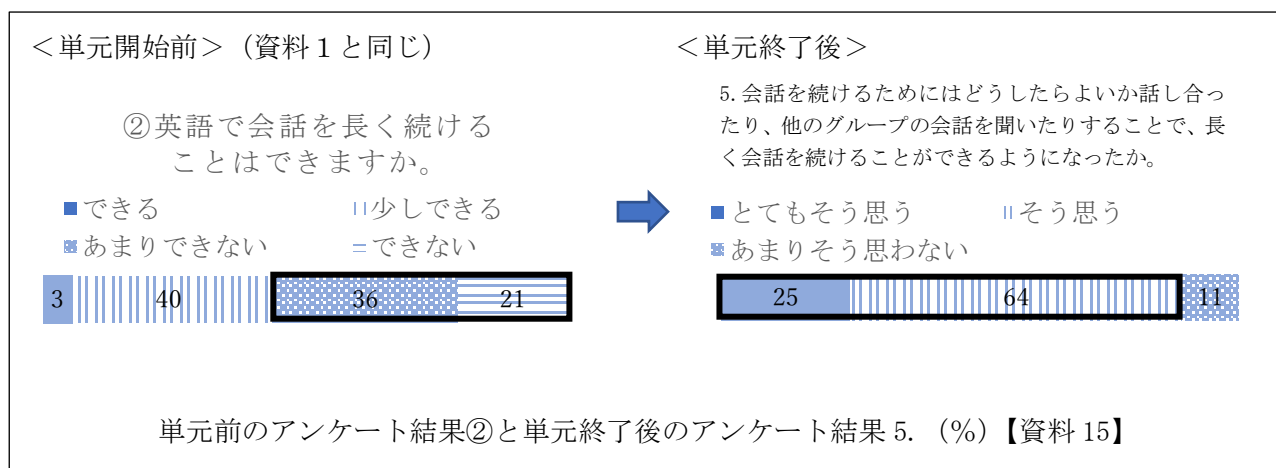


単元終了後の生徒Aのアンケート結果 4. 【資料 14】

「1 minute talking」に継続して取り組むことで、会話を長く続けられるようになったと感じている生徒が多いことがわかった。生徒Aは「とてもそう思う」と答え、「リアクション、すぐに文を作るのがうまくなった」と記述していた【資料 14】。このことから、生徒Aは、帯活動に継続して取り組むことで、会話を長く続けることができるようになったことがわかった。以上のことから、手だて③は有効であったといえる。

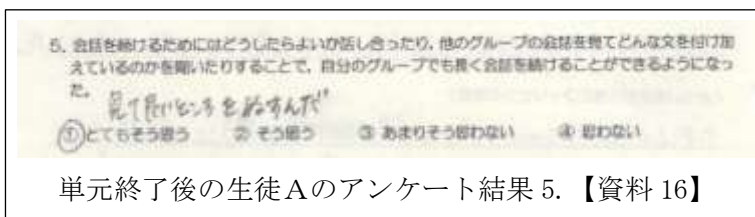
(4) 手だて④「会話を続ける方法を学び合う場の設定」の有効性の検証

第6時で、会話を続けたり話を広げたりするためにはどうしたらよいか話し合い、多くのアイデアを出すことができた。その中でも文を付け加えることに着目し、文を付け加えているグループに演示を促したことで、多くの生徒たちは、文を付け加えると会話を長く続けることができると実感していた。「みらい西」の児童生徒との会話では、どのグループも息の長い会話をしていた。生徒Aのグループでは、聞き返したり、質問を付け加えたりすることで沈黙がなくなり、3分間止まることなく会話を続けることができていた。単元終了後のアンケートで、本学級の生徒に質問 5. をたずねたところ、「とてもそう思う」と答えた生徒は 2 5 %、「そう思う」と答えた生徒は 6 4 %であることがわかった【資料 15】。会



単元前のアンケート結果②と単元終了後のアンケート結果 5. (%) 【資料 15】

話を続ける方法を学び合う場を設定し、他のグループの演示を聞くことで、会話を長く続けられるようになったと感じている生徒が多いことがわかった。生徒Aは「とてもそう思う」と答え、「(他の人の意見やグループの) 見てよいところを盗んだ」と記述していた【資料 16】。生徒Aは、第6時でグループBの演示を聞いた時、相手からの質問に対して、1人だけではなく何人かが答えることによって会話が継続していることに気づいた。そして、第8時で「みらい西」の児童と話すときに実践をすることができていた。以上のことから、手だて④は有効であったと考える。



単元終了後の生徒Aのアンケート結果 5. 【資料 16】

5 今後の課題

本研究では、「みらい西」との活動や目標の明確な設定、帯活動や会話をよりよくするための話し合いにより、すすんで会話を続ける生徒を育成できた。今後も、外国の方と会話をする機会を増やし、オンラインで世界の人々と話す時間を設けるなど、すすんで英会話に取り組めるようにしたい。また、教師の英語使用を増やし、帯活動で会話の練習を積み重ねることで、更に息の長い会話を、即興でできる生徒の育成を目指していきたい。

引用文献

文部科学省「中学校学習指導要領」(平成 29 年告示) 東山書房 p. 145